HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	ロシア極東国立総合大学函館校
Citation	高等継続教育研究, 3, 167-177
Issue Date	2004-03-01
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/51900
Type	other
File Information	FESU-3-20.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

8. ロシア極東国立総合大学函館校

日　時　　2003年8月8日　10：00～11：30
場　所　　ロシア極東国立総合大学函館校
話し手　　大渡　涼子 氏（ロシア極東国立総合大学函館校事務局）
聞き手　　姉崎・光本・石山・伊藤・上田敦・上田理・大嶋・金澤・川瀬・佐々木・染木・滝ケ平・星

沿革と現状

大渡　ロシア極東国立総合大学函館校は、ウラジオストクにある極東国立総合大学の分校として 1994 年に開校しました。四年制のロシア地域学科と二年制のロシア語科をもち、ロシア語をはじめ、ロシアの歴史・文化・政治・経済など、ロシアのスペシャリストの育成を目標に教育を行っています。

教育内容としては、両学科ともだいたい同じような感じでやっていまして、ロシア語の授業については、やっぱり語学は少人数の方が望ましいということで、1クラスの人数は少ないクラスは3人ですし、多くても 9 人です。先生方も、10 人以上になると同じ学科であってもクラスを分けたい、少人数でやりたいということで、ロシア語の授業については少人数でクラスごとにやっています。英語とか文学史とか、民族学など社会系の講義については、両科合同でやっています。ですから 1、2 年の間は勉強していることはほとんど同じなんですね。ただ四年制のロシア地域学科になるとロシアの大学卒の資格を得るために、体育ですとか法学とか経営学とかそういうようなものが何コマか多いんですよ。それで 1、2 年でだいたい同じようなことをやって基礎的なものを身につけて、それで二年制の人は卒業しますよね。ロシア語科の方は卒業ですけれども、残ったロシア地域学科の方は 3、4 年生のときにさらにロシア語とかロシア地域に対する歴史とか経済とかそういうことを深める体制があるんです。

学生の傾向としましては、二年制を希望する学生は、大学を出てきたとか、それから社会人経験があるとか、あまり時間の余裕がない人は 2 年間でとにかく短期で勉強したい。ここでまず基礎を勉強して、それ以上のことは現地に実際、ロシアに行って勉強したいという、最初からそういう目的のある学生は 2 年制のロシア語科の方に来ます。経済的な事情で 4 年勉強したいけれども 2 年しかできないという学生もいます。四年制の地域学科の方は、時間にも余裕があり、親の負担で学校に通わせてもらえる、高校からまっすぐという学生が多いですね。あと、定年退職者も時間に余裕があるものですから、終わってからロシアに行くという希望もあまりないものですから、定年退職者も四年制の方が多いですね。

本校との関係

大渡　ロシア語科修了時に授与される修了証書の本国での位置づけということなんですけれども、先ほどお話しましたとおり、ロシアの 5 年の大学カリキュラムを 4 年間で行うものですから、4 年のロシア地域学科を出たときにはロシアの本学と同じ卒業証書が出ます。それはロシア国内で通用する資格です。ただし、ロシア語科の方についてはロシア自体で短大ですとか専門学校ですとか、そういう 2 年という短期間の大学というものがないものですから、この修了証書はあくまでも 2 年間だけ勉強しましたというしるしで、ロシア国内でそれをもって編入できるとかの資格ではありません。

姉崎　終わってから向こうの大学の 3 年に編入できるということは。

大渡　四年制を出たときにロシアの大学と同じ卒業証書はもらえますけれども、それをもってロシアの大学院に直で進めるかというとそういうものでもなくて、普通のロシア人の学生と同じように大学を受験するための「外国人のためのロシア語検定試験」

も受けなくてはならないです。

姉崎　学歴上は学士になりますか。

大渡　学士になります。過去にモスクワ大学の方に入学して大学院まで行けた学生もいるんですけれども、その場合は各大学の判断になります。

まずうちの四年制を出て、極東大学の学士の資格はもっていますよね。でもその各大学の判断でこのままだとロシア人といっしょに授業にはついていけないということで、途中からまた学部に 2 年なり入って、それから大学院に進学するとか、そういう感じでやっています。ですからロシアに向こうに行って勉強したいという学生は、各大学に問い合わせてそれで認めてもらえればそのまますぐ大学院に入ることもできるんですけれども、そういう個別の状況なものですから難しいですね。

講師については、専任教員がいま 8 名おります。1 名日本人の先生がいるんですけれども、この先生は開学当初からおりまして、当初は英語だけを教えていたんです。今年からロシア語も教えるようになりました。その日本人の先生もアリゾナの方で勉強して、ロシア語専門で勉強していた先生です。そういうかたちで、教員はほとんどウラジオストク本学からの派遣になっています。ロシア人教員は 1 年更新で本人とウラジオストク本学の学長との契約になりますので、人事権とかそういうものも全て本学の学長がもっています。

学生の語学実習以外でのウラジオストク本校との関係ということなんですけれど、カリキュラムの中でロシア語科 2 年生の方は 2 年のときに 1 カ月、それからロシア地域学科の方は 3 年生のときに 3 カ月、本学ウラジオストクで寮に入って生活しながらの留学実習というのがカリキュラムの中に義務づけられています。

語学実習以外でウラジオストクと函館校の連携がどういうふうになっているかというと、函館市の青年 5 団体というのがあるんですけれども、それは函館地方法人会の青年部ですとか、青年会議所とかそういうような、企業の方々の若い人たちのいろいろなことを活動している団体、その青年 5 団体というところで構成しているロシア極東大学留学生支援実行委員会という組織があるんです。そこの方々は函館の街に役立つことを何か行いたい、ついては国際交流で、ロシアで日本に行って日本語なり日本の経済なり文化なりを勉強したいけれどもお金がない、やっぱり経済格差はありますから、そういうことを勉強したいけれどもできないという学生のために募金を募ったりとか、お金も人も協力し合ってそういう良い学生を毎年日本に招いて、せっかくここに函館校があるんですから、函館校で日本語を勉強させてあげようじゃないかという、そういう支援実行委員会というものがありまして、そこの招きで、ここの学校で 5、6 名、毎年招待して勉強しています。主催はあくまでも実行委員会なものですから、函館校としては委託を受けて授業を提供しているというかたちになります。函館市民にロシアのことを知ってもらいたいという意味も含めて、もう 5、6 年になると思うんですけれども、毎年秋に 1 カ月、5、6 名招いてやっています。

だいたい本学との関係はそんな程度だと思います。

上田理　留学生はどれくらいの期間いらっしゃるんですか？

大渡　1 カ月です。それは向こうで選抜されて優秀な学生が来るんですけれども、新潟までは自分たちで来てもらいます。新潟にウラジオストクとの直行便があるものですから、日本に入った時点から日本を出る時点まで、交通費とか宿泊費とかそこでの授業料とかそういうものを、市役所ですとか青年 5 団体ですとかそういう方々の寄付・募金という善意でまかなってやってもらっているんです。1 週間市内でホームステイしまして、残りの 3 週間は市内の安いホテルに泊まって学校に通う、そういうかたちです。

地域社会の国際交流への寄与

大渡　本校の開設に伴ってロシア語市民講座など地域社会の国際交流はどのように進んだか、また、今後の課題と展望は、ということですけれど、まず、ロシア語市民講座については平成 6 年開学当初から行っています。だいたい 1 年単位で一括りというかたちで毎年くり返し行っているものなんですけれど、年間 20 名から 40 名程度の受講生が学んでいます。その中にはもう何年間もくり返し勉強されているという方もいます。

そのほかもっと簡単に、ロシアって本当に近いけれども遠い国ですから本当に近いんだってことを知ってもらいたいということで、ベリョースカっていうのはロシア語で白樺っていう意味なんですけれども、ロシア人にとってもなじみの深い白樺の名前をつけて、はこだてベリョースカクラブというものを平成 11 年から行っています。これは、毎月 1 回 1

時間程度なんですけれども、うちの先生方はみんな日本語ができますので、日本語で市民の方を募集して、ロシアについてさまざまなテーマで講話をして、ちょっとロシアに親しんでもらおうという講座を開いています。テーマはさまざまです。ロシアの住宅事情だとか、ロシアの文学とかロシアの歌を歌おうだとか、それから1時間の間で料理をつくろうだとか、そういうことやったこともありますし、これはなかなか好評な講座です。

あと、地域社会の国際交流についてなんですけれども、函館市は、ロシアでいうとウラジオストクとサハリンのユジノサハリンスクと姉妹都市提携を結んでいますので、それに関して、姉妹都市交流というとどうしても通訳が必要になりますので、通訳とか翻訳の面でこちらの方でお手伝いしています。先ほど日本人の教員が1人いると申し上げましたけれども、その教員が2年前まで函館市のロシア語嘱託として函館市の市長の通訳をやっていたんです。市役所にロシア語を専門にできる職員の方が入ったということで、いまは英語の嘱託に変わったんですけれど、そういう通訳翻訳の面で主に支援しています。

それから、来月も中学生の交流ということで20名ほどユジノサハリンスクから1週間くらい函館に来て大沼に行って泊まったりとか、そういう日本の暮らしを体験してもらうというようなことを函館市の方で行っているんですけれども、そういうときに学生を通訳のアルバイトとして派遣したり、うちの校長が日本についてレクチャーに行ったりとか、そういうような市役所からいろいろ頼まれて協力していることも多いんです。

あとは民間レベルで、例えばサッカー少年団がユジノサハリンスクに行くから何かロシアで歌えるロシア語の歌を教えてくれないかとか、そういう様々な問い合わせがあるんですね。ユジノサハリンスクに子どもがホームステイで行ってきたんだけれど、手紙の書き方が分からないから教えてくれとか、そういうようなこともいろいろ来ますので、目に見えないかたちでいろいろやっているつもりではいるんです。

この秋から、この同じ建物の中に在札幌ロシア総領事館の函館事務所が開設されるんです。この建物は函館市の建物でして、うちが2階3階の部分で、4階5階が北海道国際交流センターという国際交流団体が入っていまして、1階にロシア領事館の函館事務所が入ります。副領事が1名常駐して、ビザ発行ですとか、そういう簡単な領事館業務を行うことになるんです。ですから、うちの学校がここにあることで、領事館と連携をとってますます日本におけるロシアセンターとしてロシアに関係することをいろいろお手伝いしていきたい、そういう役割をこれからも担っていきたいと学校としては考えています。

それから函館日ロ親善協会という親睦団体があるんですけれども、その団体の事務も一昨年から本校の事務局で執り行うことになりまして、共催していろんな行事を行ったりしています。米原万里さんといういま作家で、元々ロシア語通訳で有名な方ですけれども、その方をお招きして去年講演会を行ったりとか、ロシアからフォークアンサンブルとかピアニストの方が来て、日本でコンサートするときにお手伝いしたりとか、学校の授業とはあまり関係ないですけれども、そういうようなことをいろいろやって、ロシアのことをもっと市民のみなさんに知っていただきたい、そういうようなことを考えていまして、いろいろな行事のお手伝いをしています。

学生の状況

伊藤　入学者の方々は高校新卒者の方とか、大学卒業後の方とかいらっしゃるというお話ですけれど、割合はどんなものでしょうか。

大渡　例えば今年の場合、ロシア語科9名の中で新卒で来ている人が3名です。あとは就職してから来ている人と他の大学でロシア語を4年勉強したという学生もいます。まだまだロシアについて学びたいと、それで他の大学ではこんなにロシア人の先生ばかりのところはないですから、もう一回基礎からやりたいという学生もいます。ですから、3名と6名ですね、社会人経験のある人は6名です。

それから地域学科ですと新卒が多いです。四年制にも1人、他の大学でロシア語を勉強したという学生がいますので、経験者1人、新卒5人です。本当に年によっていろいろ激しく変わるものですから一概にもいえないんですけれども、最近は新卒じゃない方が増えていますね。

伊藤　定年退職後に来られる方がいらっしゃるというお話なんですけれど、その方たちの入学の目的はどういうものなんでしょう。

大渡　いま60代の学生が3人いるんですけれども、1人は海難審判理事所の所長さんまでやられた方です。海難審判理事所ですから当然ロシア船との事故もそういうものを裁判にかけなくちゃいけないんで

すね。そういうことで、ロシア船との事故も増えている、ロシア語は必要である、自分でも定年退職後、もともとロシアにも興味があったけれども本格的にやってみよう、ということで、それを活かしてまた仕事にどうこうということでもないんですけれども、本人の最初の目的としてはそれでロシア語の審判庁のお役に立ちたいといっていました。専門知識をもつ審判補佐人になりたいということでしたが、いまはとても楽しくロシア文学とかそういうことに新たに興味を覚えていろいろやっています。入ったときは 65 歳ですからいま 67 歳ですね、それで 9 月から留学に若い学生といっしょに行くんです。

あとの 2 人は、定年退職後に何かやらなくちゃいけないと、そういう目的で来ています。

伊藤　仕事に活かすというより趣味的な感じですか。

大渡　各自、目的はおもちのようです。

伊藤　ロシア語市民講座に市民の方々も来られると新聞で読んだんですけれど、どれくらいの方が来られているんですか。毎回同じ様な人が来ているんですか。

大渡　来ています。人数は、今年はちょっと少なくて 18 名なんですけれども、去年、一昨年ですと 30 名ずつくらい、その前ですと、さっきもお話したとおり語学の授業で先生方は 10 名以上になると嫌がるものですから、各クラス 10 名ということで入門・初級・中級・上級の 4 クラスでいまやっているんです。入門なんかですと 10 名の定員でお断りするようなこともあったんです。いまは 18 名です。

入門というのはアルファベットの読み方から始めるものですから入門は 1 年で終わり、次に初級に行きまして、初級クラスになりますと今度けっこう難しいもんですから毎回やらなくちゃ、くり返しやらないと、初級が終わったから次中級って 1 年でトントンって行ける人ってあまりいないんです。私も実は初級クラス 2 年目なんですよ（笑）。なかなか先に進んでないんです。ですから興味のある人は本当にくり返し何年もやっています。

伊藤　毎年新しく来られる方も？

大渡　毎年新しく来られる方はだいたい入門コースに最初入っていただくんですけれども、例えば転勤でたまたま函館に来て経験があるんだけれども、というような方は、年度の途中でも中級とか上級とか途中のクラスに入っていただくことも可能です。

学校経営と学生募集

姉崎　いま、実際に学んでいる学生数は定員を割れていますよね。学校経営という点ではなかなか難しいとは思うんですが、実際のところたぶん黒字じゃないと思うんですけれども、それをどういうふうにカバーされているのか。

それから、出身者が道外に多い、これを見ると富山とか敦賀とか日本海側の出身の人が出ていますけれども、それの地域の偏在なんですが、そういうところから来る学生はどうしてここを選んでいるのか、そういうところを少し教えてください。

大渡　まず学校経営に関しては、興味が特化していますので学生募集には苦労しています。現在のところ、約 40 名の学生が在籍しています。そういうことで、授業料収入は限られているので、経営上さまざまな工夫をしています。

例えば、本体の授業のほかにも道教委から委託されたりとか、青森県庁から委託されたりして、また民間の銀行さんでロシアに職員を派遣するので行く前にロシア語を勉強をさせてほしいとか、そういう授業を附帯教育としてお引き受けしてそういう授業収入もあります。あとは市民講座の受講料などです。

あと函館市の方からは運営補助金をいただいています。また、北海道からも補助を受けています。補助金をいただくにあたって、市の姉妹都市交流ですとかそういう市の仕事にも協力するということで、いただいています。また、事務局の次長に市役所の係長職を 1 名派遣ということでいただいています。その他、ロシア関連企業・経済界の寄付もあります。それとここの建物は市の建物ですけれども、市から無償貸与ということでただでお借りしています。

上田理　本学からの支援はないんですか。

大渡　本学からは全然ないんです。派遣の教員が来るだけです。教員の給料も授業料収入の中からこちらが払っているものですから、本学との資金関係はありません。

あと出身者の関係ですね。敦賀とか富山とかパンフレットに載っているのはたまたまそういう人が多いんですけれど、富山商船高等専門学校の出身生が 1 人来ています。富山商船ではロシア語の授業を行っていて、一昨年まで、夏休みにロシア語を学ぶ学生の短期集中講座みたいなものも請け負ってやっていたんですね。そういうところでやっているうちに興味が芽生えて、いまそのパンフに載っている学生は、高専ですから 5 年間のところを 3 年間で辞めて、

高校卒業資格としてうちの学校にロシア語をどうしてもやりたいということで入学している学生です。それから敦賀気比高校というところには、本学の先生が高校の方に派遣で行って、やっぱりロシア語の授業をもっていたことがあるところです。日本海側はロシアとの交流がさかんですから、そういうことで興味をもってきたっていう学生も多いですね。

学校でも学生募集をして歩くにあたって日本海側に重点をおいて敦賀とか新潟とかそういうところへも行っています。あとは北海道ですと、釧路とか稚内とか。たぶん地域で括ってしまうと日本海側が多いかなという気がしますけれども、本当にいまインターネットの時代でみんなどこからでも調べて興味があれば来ます。今年も、下関からという人もいます。その人はもともと下関の高校で韓国語を勉強していて、語学に興味がある、ロシアじゃなくて語学に興味がある、それで韓国語じゃない言葉をやりたい、そういう学生です。

それからあとは大阪とか札幌もいます。さまざまですね。青森もけっこういるんです。青森はハバロフスクと直行便が飛んでいたりとか、けっこう交流が進んでいますので、そういう交流をしている中でロシアに興味をもったという学生が多いものですから、青森もけっこう多いです。地域性としてはやっぱり青森から日本海側ですね。

滝ヶ平　函館市内出身の人があまりいないですけれど、これは高校生たちに対して PR 活動とかは何かしてないんですか。

大渡　さまざまな新聞にも取り上げていただいて、函館市民にも PR するようにはしているんですけれど、まだうちの学校はロシア人が勉強している学校だと勘違いをしている人がけっこういるんですよね。それでことあるごとにうちは日本人がロシア語を勉強する学校ですというふうには紹介しているんですけれど、なかなかそういう認知をされていない部分も残念ながらあります。あと市内の高校に対しては学校訪問をしていますし、市内の先生方をお招きして学校で授業を見ていただいたりとか、専修学校連合会で行っている進学説明会にうちの学校も参加したりとか、そういうことで市内の学校についてはアピールはいろいろしているつもりなんですけれども、なかなかやっぱりロシア語って市内にあるだけでは来ないんですね。

入学者の決定方法

滝ヶ平　具体的な入学資格とか要件、それから入学するための方法、学科試験なりあると思うんですけれど、そこらへんを教えてください。

大渡　入学試験は、いま、指定校推薦入試というのと、普通の推薦が自己推薦と学校推薦、それと一般入試と、3 タイプあるんです。

指定校推薦は、語学ですとか国際交流に熱心な学校さんには特別に 1 名の枠を設け、学校長の推薦があれば無試験で大丈夫というものです。その代わり四年制しかだめなんですよ。4 年間必ずロシア地域学科に入ってください、その代わり入学金を免除します。そういう制度があります。それを利用して去年 1 名、今年 2 名入っています。

そのほかは学校推薦も一般試験も試験内容としてはいっしょなんですけれども、うちはペーパーテストはしていないんです。書類選考と面接だけです。ただし､ロシアの学校で先生方も厳しいですからね、日本の学校と違いますから、門戸は広げますけれども、入ってからは厳しいですよ、ということでやっています。特別入るのが難しいってことではないんですよ。ふるいにかけているわけではないんです。

入学後の状況

上田理　厳しいというのはどういう意味で。

大渡　まず 1 日 3 コマびっしりやるんですね。多いときは 4 コマあるんです。法学とかそういうものがあるときに 1 日に 4 コマ。それで週 5 日です。宿題もたくさん出ますし、自分で勉強してないとついていけないんですね。1 日休むともう次の日分からなくなります。2 日 3 日休むと全然分からないというような状況で、みんなで勉強していかないとできない。先生方も、うちの学校は 8 割出席してないと試験を受けさせません。そういうシステムになっていますから、私たちが大学に行ってたころは最初と最後だけ来ればいい、みたいなこともありましたけれど、そういうようなことはないんですね。

姉崎　退学者とか落第とかそういうのは。

大渡　ですから留年もいますし、退学者も出ます。学習意欲や目的のない学生さんはやっぱり続かないんです。どうしても辞めちゃいますね。

それと、ちょっと話は違いますけれども、ここの学校にいるよりもやっぱり本国で勉強したいといって退学する、そういう前向きな退学もあるんです。今年も 1 年生が終わった時点で 2 人が退学して、ロ

シアに行ったり、あとは別の学校に行ったりとかする学生もいますね。

上田理　本学にここに入学したという事実が認められて、そのまま向こうに移行するわけにはいかないんですか。

大渡　入学したことは本学に全部登録されていますけれども、退学者は修了したことにはならないものですから、特にはありません。1 年生から何年生まで在籍したという記録だけです。

上田理　ここで取った単位は。

大渡　それは認められないですね。

光本　結局本学の単位にはまったくならないわけですよね、ここでは。

大渡　ならないですね。

光本　ちょっとそれは変な感じもするんですけれど。

滝ヶ平　分断されているような感じですか。ロシアの極東大学とこっちの大学と。

姉崎　ダブルスタンダードとなっているわけですね。ブランチだけれども日本版っていうか、本校とは違う。

大渡　そうですね。

光本　名前と講師の貸し出しという感じですね。

大渡　単位の互換とかないものですから、そういう意味ではまったく別物という感じですね。

教員の人事、待遇

光本　本学から来ている先生方はずっといっしょですか。代わられたりするんですか。

大渡　それは代わります。

光本　どういうかたちで代わるんですか。本校がローテーションを行うんですか。

大渡　ええ、本学の方で、学長の人事権なもんですから。それからそれぞれみんな担当科目が専門が違いますから、先生の事情でどうしても帰国しなくちゃいけないことになった場合にまた違う先生が来ます。先生方は先生と学長の 1 年契約なものですから 1 年単位で、来年どういうふうになるかっていうのは分からないですね。

光本　みなさん、ご家族もいっしょに来られたりするんですか。

大渡　いま家族がいるのが校長と教頭だけで、あとは単身ですね。

姉崎　1 年で去っていかれたりすると学生が継続して関係をつくって学んでいこうというときには、不安になったりとかっていうのはないんですか。

大渡　1 年契約ですけれども更新しますから、実際は 1 年で帰る先生はいないんです。一番長い先生でいま 7 年目ですね。一番新しい先生でも 3 年目です。

姉崎　そうすると 1 年で入ると 4 年次ぐらいまでは。

大渡　ええ、いますね。校長もいま 5 年目ですし、そんなに代わるわけではないです。

姉崎　それは先生方が望んでそうするのですか。

大渡　望んでいる場合もありますし、あとは学長命令というときもありますね。

上田理　いま学長とおっしゃったのは本学のですか。

大渡　はい、ウラジオストクの学長です。

姉崎　来られている先生方はどういう印象をおもちなんでしょうか。向こうでも教えているわけだから、ロシアの学生と日本人の学生の比較もできると思いますが。

大渡　思っていたよりも日本人は勉強しない、ということらしいです。

実際ウラジオストクから秋に留学生がうちの方に 5, 6 名来て勉強していますけれども、みんな真面目なんですよね。ロシア人というとニュースなどでは悪いイメージをもたれている方も多いかもしれませんが、勉強しようとか、あとはうちの学校の先生方たちを見ていてもそうなんですが、みんな真面目だし、日本人よりもはるかに勤勉なんですよ。それで先生方は、やっぱり日本人のイメージは勤勉であると、働きアリであると思って日本に来るけれども、どうして日本人の学生はこんなに勉強しないんだ、宿題はやってこないし学校にも出てこない、とそういう意味でカルチャーショックみたいです。

光本　宿題やってこないし、学校に来ないんですか。

大渡　そうですね。

伊藤　社会人入学の方は。

大渡　そういう方はやっぱり自分のお金で入っている方は熱心なんです。自分の授業料だと思うと、そういうものは休まない、必ず身につける。親にお金出してもらっている人はあまり、という傾向が強いですよね。

光本　下の部屋にうかがったときに、看板が「教職員室」となっていましたけれども、先生方の部屋はあそこだけですか。研究室はないんですか。

大渡　ないんです。

光本　みなさんそれで不満はないですか。

大渡　ないですね。校長は校長室あるんですけれどほとんどいませんからね。職員室にいますからね。

光本　じゃあ休み時間というか授業のない時間はだ

いたいいるんですか、そこに。
大渡　あそこにいるかもしくは自宅ですね。
姉崎　教授というのは本学での教授の方なんですか。
大渡　はい、それは本学の資格です。
姉崎　本学の待遇とこっちに来られたときの待遇は同じなんですか。
大渡　日本にいる方がいいみたいですね。詳しいことは分かりませんけれども。やっぱり日本では日本の基準で払いますから、日本の基準といってもうちもそんなに儲かる学校でもないんで、一応外国人が日本に入って教育ビザで就労するための最低基準というのがありますよね。それ以上はもちろんお支払いしますので、ロシアでもらっているよりはいい給料です。
光本　ロシアの事情は厳しいんですね。

留学生の支援、国際交流

金澤　さっき留学生の話で出てきたんですけれど、1 週間ホームステイされるんですよね。そのホームステイの斡旋先というのは。
大渡　青年 5 団体など支援実行委員会を構成している団体がありまして､そこの方にお願いしたりとか、市役所とか、あとうちの学生、せっかくそういうロシア人が来る機会ですからホームステイで預かって勉強しなさいと、そういう感じでいろいろ募集します。
金澤　人数は。
大渡　留学生は 5、6 名です。
金澤　その滞在先は支援実行委員会の方で探していただく感じですか。
大渡　やっぱり支援実行委員会主催なものですから、そっちでメインで探していただいて、あとはうちの学校の学生も声かけてくれっていわれると学校で学生に声をかけるんです。そういうかたちですね。
金澤　もう一つ、はこだてベリョースカクラブっていうのは好評だという話が出たんですけれど、人数とか講師の方々の参加状況はどういうものなんでしょうか。
大渡　1 年単位なんですけれども、人数は 4 月に募集をかけて 25 名、定員で 25 名。先生はうちの 8 人いる先生方の中で回して毎月 1 人。夏休みとか冬休みとかがありますから、年 7 回とか 8 回やっています。
金澤　参加する方々はロシアそのものに興味があるんですか。それとも近いなっていうことで親近感をもっていらっしゃるっていうのがあるんですか。
大渡　これは月曜日の 3 時からやっているんです。だからお勤めしている方は来れないものですから、どうしても年配の方が多いんですよ。年配の方ってある程度、ロシアに郷愁とかそういうものをロシア民謡とかロシアの映画とかそういうものに興味をもっている方が多いので、やっぱりロシアに興味があるからっていう方が多いですね。

卒業時の資格

姉崎　日本では二年制は専修学校ですが、四年制の方も専修学校の扱いなんですか。
大渡　専修学校の中の専門課程だからどちらも専修学校卒ですね。
姉崎　すると実質的に、例えば市役所に入ったりとか民間企業に入った場合に、職務上はそれぞれ短大卒とか 4 大卒と同じ扱いとして受けるんですか。
大渡　それはやっぱり企業なり官庁の判断によると思います。函館市役所の場合は、大学卒の資格で取ってもらっています。稚内市役所に行った学生は、もともと他の大学を卒業して高校の教師をやっていた人ですから、大卒で入っていると思います。普通の企業の場合でも応募するときにこう事情を説明して向こうの判断になります。
姉崎　大卒で無業でいるのと、こういうかたちで学んでいる場合だと、処遇上の前歴換算みたいなところで違ってきますよね。ここはそういう意味では継続して学んだっていうそういう位置づけを卒業証書を出せば、だいたい各受入先で経歴が換算される、そういう扱いを受けているんですか。
大渡　だと思いますね。やっぱり大学卒のほかにロシア語もしゃべれるということでプラスになっていると思うんですけれど。企業によっては、大学出てからうちの学校を卒業した専門学校卒として取るのか、大学卒の資格をもっている人は、うちじゃなくて大学卒の方が優先されちゃいますから、うちの卒業が付随みたいなかたちですね。

極東国立大学本校から見た FESU

上田理　この大学が函館市に来た一番のメリットは何なのでしょうか。
大渡　まず日本の国立大学を函館市に誘致しようという運動から始まって、その国立大学の誘致は難しいということになりました。新大学の設置もなかなか難しい。そういう状況の中でたまたま極東大学が

日本で場所を探している、そういう話があったときに、前の亡くなった市長ですけれども、その市長が熱心でして、じゃあ函館に、ということになりました。函館はロシア人墓地があったりとか教会があったりとか昔領事館が置かれていたりとか、そういうロシアと関わりの深い土地なので、極東大学の方でもそれはいいじゃないかということになったと思うんですね。

上田理　ロシアの大学にとっては何のメリットがあるか興味があるんですけれども。

大渡　函館市が建物の無償貸与等誘致に熱心であったということと、ロシアに関係が深い土地であるということだと思うんですよね。

ロシアからの留学生

上田理　留学生の方々が 5、6 人見えるということですけれど、その 5、6 人の学生さんたちはここで授業を受けるわけですよね。そのときロシア語科とは別々ですよね。

大渡　日本語の勉強をしに来る学生ですから、留学生のために特別に日本語の授業を設けます。それはうちの先生がやります。日本人の先生もいますから。

上田理　ここの日本人の学生さんとの交流はどうなっているんですか。

大渡　授業自体はまったく別です。うちの先生が日本語で授業をします。日本文化について、お決まりですけれど、お茶とかお花とか書道とかそういう授業も行います。

　うちの学校の学生との交流というと、昼休みに話をしたりだとかそういうこともありますけれども、やっぱりロシア人の学生が来ることによって刺激を受けるんですね。ロシア人と、ネイティブと話すということで、放課後遊びに行ったりとか、そういうこともしますし、あと秋、11 月なんですけれど、学校でお祭りをやります。「はこだてロシアまつり」といいまして、学祭というよりは函館市民の方にロシアを知ってもらおうというただ単に学生のお祭りというよりはそういうことでいろいろみんなで事務も協力してやるんですけれども、そのときに留学生といっしょに歌を歌ったりとか学生同士でいろいろやったり、あとはロシア料理のレストランなんかもやりますから、学生といっしょにつくったりとか。そういうような交流はしています。そこで日本語を勉強している学生が来るもんですから、ここでいろいろ交流をはかって、次に今度うちの学生が向こうへ行ったときに向こうで面倒を見てもらったりとか、そういう継続してお付き合いはあるみたいです。

ロシア語教育

上田理　先ほどちょっとお話があったんですけれど、ロシア語は中級者でも難しかったと　そうすると二年制っていうのは難しすぎるということはないですか。

大渡　週に 1 回の市民講座ですと 1 年や 2 年くらいじゃ大変だっていう話で、学生は毎日 2 コマなり 3 コマなりロシア語ばっかりやっていますから、2 年間である程度の基礎はつきます。それではもちろん完璧ではないですけれども、2 年間ではなんとか普通に話はできるようにはなります。

石山　そこに書いてあるロシア語は何を意味しているんですか。

大渡　これはちょっと難しいですね。変化っていうか、いろいろロシア語にも男性名詞女性名詞などありますから。

光本　授業の教材が貼ってあるわけですね。

姉崎　ネイティブがこれだけいて、集中的に毎日やっているやり方。日本にも外語大のロシア語科などがあると思うんですが、そういうものとの教授法の違いがあるのかないのか、あるいはそういうものが不可欠だという理由について。それからもう一つは函館地区にどれくらいロシア人の方がいらっしゃって、そういうロシア人コミュニティーみたいなものとこの大学との間の一定のつながりがあるのかということ。三つ目は、我々高等教育グループは、地域と大学という観点で毎年見ているんですけれども、極東大学が函館に来ることによって函館地区にある他の大学や機関との連携とか教員や学生の交流とか、そういうようなものが多少出てきているんじゃない

だろうか。その 3 点についてお聞きします。

大渡　まず 1 点目の他の外語大とかそういうところとの教授法の違いについては、他大学の授業については承知しておりませんが、本校の授業の特徴は、ロシア人教授陣がペアを組み、日本語で説明したあと、ロシア語のみで演習するというツー・ステップの授業です。

外大を出たっていう人はいないんですけれども、例えば他の大学で 4 年間ロシア語勉強しました、ロシア語ばっかり 4 年間勉強したという学生が、実際うちの学校に来て入学試験のときの面接試験では、普通は日本語で面接しますけれどもそういう学生に対してはロシア語で面接します。そうするとやっぱり聞けないんです。日本人の先生に教わっていると耳がちょっと慣れないというのが実際私たちが感じているところです。よその大学を見てきたわけじゃないですけれども、外務省の方なんかが以前こちらにいらして授業を見学されたときには、日本でロシア人がいてこういうみっちり教えているようなところはないだろう、というような話はされていました。

あと、教科書とかそういうものは皆さん同じような教科書を使っていると思うんですね。うちの先生のオリジナルっていうのももちろんありますけれども。

姉崎　大学だと教養教育とかそういった関連する授業っていうのをたくさん用意しますけれども、ここは最低限ですか。

大渡　そうですね。ロシア語科の方は本当にロシア語ばっかりです。ロシア地域学科になりますと少し語学だけ分かっていてもダメだということになりますが、でもそれもロシア地域学ですから、ロシア経済・民族・国家体制とかそういう関連するのもありますけれども、ロシア関係ですね。

函館市のロシア人コミュニティー

姉崎　ロシア人コミュニティーについては。

大渡　函館市内にいるロシア人は全員うちの教員です。

姉崎　そんなに少ないんですか。

大渡　はい。うちの教員ならびに家族です。住んでいる人は少ないですね。船が入ったりすると街中ロシア人が歩いていることがけっこうありますけれども、それと未来大学に 1 人、ウクライナからいらしてる先生がいますので、その先生もソ連というくくりでいうとそうなりますが、その先生くらいのものですね。

うちの学校はいろいろ行事の好きな学校なんです。ここはすごく眺めがいいんですよ。職員室からが最高の眺めなんですけれど、ここで花火大会の花火を見ようとか、そういうときにはウクライナの先生もお招きしたりとか、そういうようなこともやっていますし、本当にコミュニティーって小さいものですから、そういう意味では本当にみんなお互いに仲良くやっています。

函館地区の大学間交流

姉崎　3 番目は日本の大学との交流ということで。

大渡　実は函館市内の大学ともあまり交流というのはないんです。教員が函館大学の方に非常勤で行って、ロシア語を教えたりとか英語の先生が教育大学へ行ったりとか、そういう派遣とかはあります。学生同士となるといっしょに合同で何かやろうとか、そういうこともなくて、函館市内の学生が集まってやっている大門祭とかそういうようなイベントには個々の学生の意思で参加しています。学校として学校同士で何か付き合いがあるかっていうと、あんまりなくて、未来大学にコミュニケーションウィークっていうのがあって、あそこに外国人の先生がけっこういますよね、そこでコミュニケーションチームが国際交流とかいろいろなことをやろうという、その一環としてうちの合唱団が呼ばれていって歌を歌ったりとか、そういうのは向こうの先生から声がかかって先生同士で頼まれて行ったりします。

学生自治会・教授会

姉崎　学生の自治会とかそういうものはやっているんですかということと、教員はブランチだけれども、教授会とかそういうものがあるのかどうかという 2 点について。

大渡　自治会は人数が少ないもんですから全員自治会に入っていまして、自治会長がいます。ただ、よその学校みたいに目的をもってはっきりやっているわけじゃなくて、ただ幹事みたいなものですけれど、歓送迎会やるときの幹事とか、お祭りをやるときにはまた別にロシアまつりの実行委員会というのを立ち上げるんですけれども、それがだいたい自治会役員が主になってやったりとか、その程度です。特に選挙とかもなくて、あなたがやればっていう感じで決まっちゃうもんですから、そんな感じですね。

教授会は、毎月 1 回開催して、教員同士でいろいろ

話し合っています。

姉崎　そこで決まったことが例えば本学との関係で権限を発揮されるとか。

大渡　函館校の学生に関することは函館校で権限を全部をもっています。授業の進め方などについてです。例えばちょっと問題が起きた学生をどうするとか、そういうことは全てうちの教授会で決めます。

あとは、本学との連絡の取り合いは校長が把握しているんですけれども、向こうの大学も大きい大学なものですから､国際部というところがありまして、そこでロシア語学校というのをもっているんですね。そのロシア語学校でうちの学生がロシアに行ったときには勉強をしたりとか、そのような学校をもっている国際部というところがあるんですが、そこと主に連絡をとっています。

姉崎　日本人の先生を登用するときはここの教授会で決定して採用するのでしょうか。それとも本学にそういう権限があるのでしょうか。

大渡　派遣以外については、学校法人なものですから私立の専修学校ということで、学校法人函館国際学園としての雇用となりますから、極東大学本学の権限ではまったくないです。

姉崎　違うかたちなんですか。

大渡　はい。

光本　じゃあ鳥飼先生は極東大学の教員資格をおもちでないということですか。

大渡　極東大学の資格ではないですね。

カリキュラム編成と道の認可

光本　カリキュラムは本国の五年制のものを圧縮してつくったという話でしたけれど、開講科目はやっぱり本国の方が多いと思うんですよね。それで、どなたがこういうカリキュラムを立てられたのか、そして見直しの議論などはされているのかをおうかがいしたいんですけれども。

大渡　うちの学校は平成6年に各種学校というかたちではじまりまして、それから平成8年に道の認可をいただいて専修学校になっているんです。専修学校としてのしばりもありますので、最低単位数などが全部決まっていますから、そういうのを含めまして、開学当初とは随分カリキュラムの内容自体変わってるようです。

最初の頃は、もうちょっとロシアの遊びといったら変ですけれど、ロシアの民族舞踊を踊る授業とかそういうのもあったみたいですけれども、極東大学の方からこういうものもやらなくちゃダメだよって決められているものと、あとは先生方の間でこのままじゃダメだからこうしようとかということで、全部教授会で話し合って決めていますね。

ただ、科目を変えるに当たってもいちいち道の認可がいりますから、そんなに簡単には変えられないんです。最初の頃の学校の体制自体が変わってたときにはけっこう変えていましたけれども、ここ何年かではそんなに変わっていないはずです。

光本　カリキュラムをいじると道の認可が必要なんですか。

大渡　ええ、全部道の認可で何を何時間っていう科目の登録とかしなくちゃいけないものですから。

姉崎　道庁の総務部あたりでしょうか。

大渡　学事課です。

卒論・ゼミナール

上田理　卒論とか卒論発表会とかはするんですか。

大渡　四年制の地域学科の方では3年次に学年論文というのをまず日本語で作成します。それは先生方がテーマをいくつか出して、興味があるものを選ぶっていうかたちなんですけれども、例えばロシアの政治体制だとかあと文学に興味があるとか言語に興味があるとか、いろいろ興味はありますので、それぞれ好きなテーマを選んで先生について日本語で簡単な論文をつくります。それを元にして、4年生になったときに卒業論文としてつくるんですけれども、せっかくですからロシア語で書こうということで、ちょっと1人ではできないので先生に手伝ってもらいながらロシア語と日本語で論文を書きます。最後に卒論発表会とかそういうものももちろんやりますし、それで評価されて卒業します。

上田理　ロシア語科の方は。

大渡　ロシア語科はないんですよ。

上田理　ゼミナールのようなものはありますか。

大渡　ゼミはありますけれど、人数が少ないものですから全員同じ一つのゼミなんです。それで、今年はこれをやりますって､上から決めちゃうんですね。学生の希望はなかなか聞けないんです。

図書室・図書館職員

光本　図書室はありますか。

大渡　はい。

光本　本国の大学の方から貸し出しがあるとか、ちょっとそういう専門書は本国から取り寄せられると

か。

大渡　それはやっていないです。主に北大図書館や東京の日本ロシア語情報図書館を利用しています。

　ロシアは郵便事情が非常に悪くて、書類を送っても 3 カ月も届かなかったりとか、そういうこと多いものですから、いまでもそうなんですが、書類関係については人が行って受け取りするのが一番確実で、貸出とかそういうのは簡単にできません。

　うちの学校で買った本もほとんどですけれども、ロシア関係の本については寄贈図書というのが随分多くて、外交官の方がもう亡くなって要らないからって送ってもらったりとか、そういう本が多いですね。

姉崎　大学図書館の司書の方はおられる？

大渡　ええ、非常勤ですけれどもおります。

姉崎　開学当初から？

大渡　はい。いまいる方は最初からではないんですけれども、もう 5 年目くらいですかね。非常勤ですから毎年更新でやってます。

姉崎　司書資格ももっていらっしゃる。

大渡　はい。

職員・役員

光本　大渡さんがこちらに来られたのは函館市からの派遣ということでしょうか。

大渡　市からの派遣は次長だけです。次長だけは職員です。

光本　では、大渡さんはこちらの学校法人の職員ということですか。

大渡　そうです。

光本　ずっとここで仕事をしているんですか。

大渡　ここに来て 4 年目です。

姉崎　学校法人の職員数は何人ですか。

大渡　職員は 4 人です。学校法人の理事長は本学の学長なんです。本学にいて年に 2 回くらいしか来ないもんですから、理事長代行の専務理事も 1 名おります。あとは事務局長と市役所から派遣されている次長と私ともう 1 人女性職員ですね。職員としては 4 名です。

光本　どうもありがとうございました。